様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年　6 月 13　日現在

機関番号：84305
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2010～2012
課題番号：22590674
研究課題名（和文）プライマリケア医とコメディカルの糖尿病診療スキル向上プログラム開発と有効性の検証
研究課題名（英文）　Development and evaluation of the educational program for primary care physicians and healthcare providers to improve their skill for diabetes care

研究代表者　岡崎　研太郎（Kentaro Okazaki）
独立行政法人国立病院機構（京都医療センター臨床研究センター）
臨床研究企画運営部・研究員
研究者番号：90450882

研究成果の概要（和文）：
患者中心の理念、エンパワーメントに基づく医療者教育プログラム「糖尿病劇場」を開発した。糖尿病劇場は、よくある糖尿病診療・療養指導の風景をモチーフとした演劇と、引き続き参加者とともにおこなうディスカッションの組み合わせからなるワークショップ型のプログラムである。研究期間中に、全国各地で 40 回以上のプログラムを実施した。参加者への質問紙調査の結果、参加者は、本プログラムの理念に賛同するとともに、高い満足度を示していた。プログラムスタッフへのフォーカスグループインタビューの結果からは、自分の療養指導を振り返るきっかけとなり、コミュニケーションスキルの重要性を実感し、患者に対し糖尿病を持つ人として見る視点を獲得できたなどの効果が明らかになった。

研究成果の概要（英文）：
We developed a novel educational program “Diabetes Theater”, which includes both drama play and a discussion with audience. Diabetes Theater focuses on the art side of diabetes care, especially a patient-centered medicine, in other word, diabetes empowerment. We conducted this program more than 40 times all over Japan during the research period. The questionnaire survey showed most of the participants agreed the philosophy of the program and were satisfied with it. Focus group interview with program staff revealed that they realized the importance of communication skill and could become to see patients as people living with diabetes.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	700,000	210,000	910,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
2012 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	1,700,000	510,000	2,210,000

研究分野：医歯薬学
科研費の分科・細目：内科系臨床医学・内科学一般（含心身医学）
キーワード：糖尿病劇場、糖尿病、プライマリ・ケア、医療者教育、エンパワーメント、コミュニケーション、ワークショップ

１．研究開始当初の背景

日本における糖尿病患者数は増加の一途をたどっているが、糖尿病専門医は全国で約3,300 人に過ぎず、すべての患者を専門医が診療することは現実的に不可能であろう。

したがって、糖尿病診療においては非専門医の役割が重要になるが、「プライマリ・ケアに従事する医師の多くが、糖尿病の診療は高血圧、狭心症、関節痛など他の慢性疾患の治療に比べて難しいと感じている」という報告がある（Larme AC, Pugh JA. Diabetes Care, 1998）。このような糖尿病非専門医に対して学習の機会を提供することにより、医師の糖尿病診療に関する知識や態度、技能が向上し、ひいては非専門医を受診する大多数の糖尿病患者の QOL 改善に貢献することができると思われる。

また、糖尿病診療におけるチーム医療の重要性は広く認識されるようになっており、日本糖尿病療養指導士は約 13,000 名に上る。こうしたコメディカルスタッフの糖尿病ケアにおける知識、態度、技能の向上を図ることは、患者にとっても大きな恩恵をもたらすものと考えられる。

さらに、糖尿病のような慢性疾患の診療においては、伝統的な医療者中心型のパターナリスティックアプローチでは早晩行き詰まり医療者と患者の双方にフラストレーションが溜まる結果に終わることが多いと指摘されている（Funnell MM, Anderson RM, et al. Diabetes Educ, 1991）。そこで、最近では患者のライフスタイルに合わせた医療に対するニーズの高まりとともに、エンパワーメントアプローチに代表される患者中心の医療の必要性が主張されてきている（Anderson RM, Funnell MM. Patient EducCouns, 2005）。すなわち医療者が一方的に患者に指示する従属関係から、患者個々に合わせたテーラーメイド治療を医療者と患者が治療同盟を組んで実施していく協力関係へとパラダイムの変換が求められている。

２．研究の目的

（１）糖尿病診療において患者中心の医療に基づく医療者教育の手法を確立すること

医療者の卒前・卒後教育においては、これまで急性疾患モデル（パターナリスティックアプローチ）をいかに学ぶかが重視されてきたが、糖尿病に代表される慢性疾患においては、むしろ患者中心の思想に基づくエンパワーメントアプローチの方がよりよいアウトカムにつながるという報告が多い。この患者中心の糖尿病医療という理念を理解するとともに、理念に基づく診療スキルを身につけられるような、医療者を対象とした研修プログラムを開発する。

（２）開発した研修プログラムの評価をおこなうこと

開発した研修プログラムが想定どおりの効果を有するかどうかを、プログラム参加者とスタッフを対象にして、質問紙やフォーカスグループインタビューの手法を用いて検討する。

３．研究の方法

（１）ニーズアセスメントのためのミーティング

岡山で開催された第 53 回日本糖尿病学会年次学術集会、および東京で開かれた第 42 回日本医学教育学会大会の際に、数施設の医師、看護師、管理栄養士、薬剤師、臨床検査技師らを集めてミーティングを開き、本研究のテーマに関するニーズアセスメントを実施した。これらのミーティングの結果、糖尿病診療においても、患者のライフスタイルに合わせた医療や、エンパワーメントアプローチに代表される患者中心の医療の必要性が再確認された。

（２）研修プログラムの開発

ニーズアセスメントのためのミーティング結果を元に、参加者が適度な知的負荷を感じ、興味を持ち、主体的に参加でき、学んだ成果を自分自身の日々の糖尿病ケアに生かせるような、興味深いコンテンツとユニークな仕組みを兼ね備えた研修プログラムを開発した。

（３）研修プログラムの評価

＊研修参加者を対象として

いくつかの研修プログラムにおいて、参加者に質問紙を配布し、当日回収した。

質問項目は、糖尿病劇場の理念に関するものと、糖尿病劇場のスタイルに関するものから構成されていた。

＊研修プログラム実施スタッフを対象として

研修プログラムにスタッフとして関与した医療者を対象に、後日、フォーカスグループインタビューをおこなう。インタビュー内容は対象者の同意を得た上で録音し、後日、SCAT 法を用いて結果を質的に検討する。

４．研究成果

（１）糖尿病診療スキル向上プログラム「糖尿病劇場」の開発と普及活動

患者中心の医療というエンパワーメントの理念を理解し、糖尿病診療・療養指導の現場でこの理念に基づくケアを実施するための具体的なスキルを獲得するための教育プログラムを開発した。このプログラムは、ワークショップ型医療者教育プログラムであり、「糖尿病劇場」と命名した。

「糖尿病劇場」とは、日常どこでもみかけるような糖尿病患者の診療風景をモチーフとした演劇を上演し、その後に参加者（聴衆）とディスカッションをおこなうという形式のワークショップである。このワークショップを通じて、演劇に登場する患者と医療者のすれ違いの原因を皆で考えることによって、参加者が自分の日常診療（療養指導）を振り返り、よりよい診療・療養指導スキルを身につけることをねらいとしている。演劇のテーマは、患者-医療者間のコミュニケーション、望ましい患者-医療者関係、家族のサポート、チームとしての糖尿病ケア、などで、診療のトピックは栄養指導、服薬指導、フットケア、血糖自己測定、インスリン導入など多岐にわたる。

この糖尿病劇場は、これまでに全国各地で 40 回以上開催することができた。平成 23 年度を例に取ると、札幌（第 54 回日本糖尿病学会年次学術集会、医療者全般）、熊本（糖尿病療法研究会　第 31 回研修会、医療者全般）、名古屋（第 8 回糖尿病チーム医療研究会、医療者全般）、神戸（第 21 回日本医療薬学会年会、薬剤師）、甲府（糖尿病療養セミナー、医療者全般）、松本（第 10 回長野県糖尿病療養指導研究会、医療者全般）、名古屋（糖尿病注射薬導入に関するワークショップ、薬剤師）、沖縄（実践的糖尿病研究会、医療者全般）、大阪（第 20 回糖尿病療養指導士講演会、検査技師）、新潟（糖尿病劇場 in 新潟 2012、薬剤師）、東京（若手医師のための家庭医療学冬季セミナー、医師）と 11 回の開催を数える（開催日時順、カッコ内は研修会のタイトルと対象者）。

また、平成 24 年には、医療者のコミュニケーション能力の向上を目的として、プロのインプロバイザーを講師とした多職種参加のインプロワークショップを番外編として企画・実施した（京都、医療者全般）。

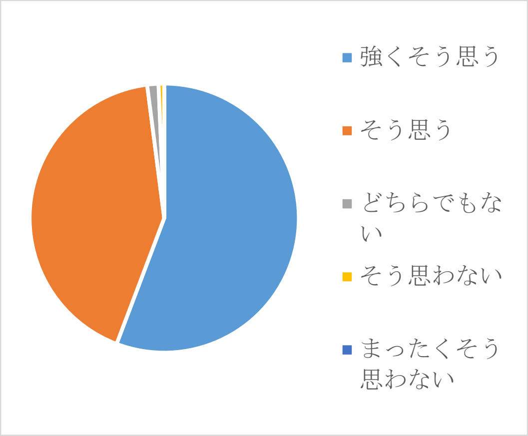
（２）「糖尿病劇場」の評価：参加者の視点から

大阪で実施した糖尿病劇場を例にとり、参加者への質問紙調査結果を示す。

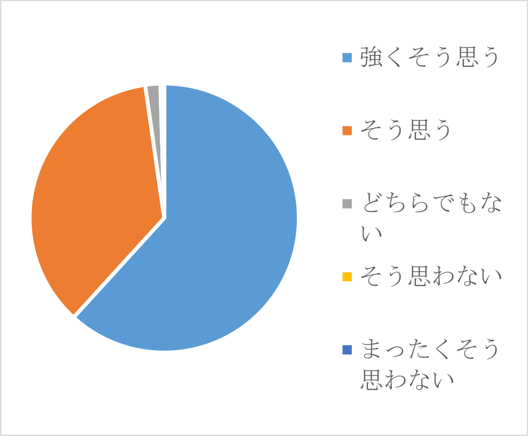
質問紙調査への回答者は総計 447 人（男性 85 人、女性 362 人）で、回答率は約 75%であった。年代は 40 歳代が最多で、以下 30 代、50 代、20 代 の順に多かった。また職種別では栄養士が 32%と最多で、次いで看護師（30%）、医師（15%）、薬剤師（10%）の順であった。コメディカルの約半数が日本糖尿病療養指導士であった

糖尿病劇場の理念に関する質問では、医療者は「コミュニケーションの訓練を受けるべき」（平均 4.5）、「カウンセリングの技術を学ぶべき」（4.6）、「一緒に目標設定する方法を学ぶべき」（4.6）であった。

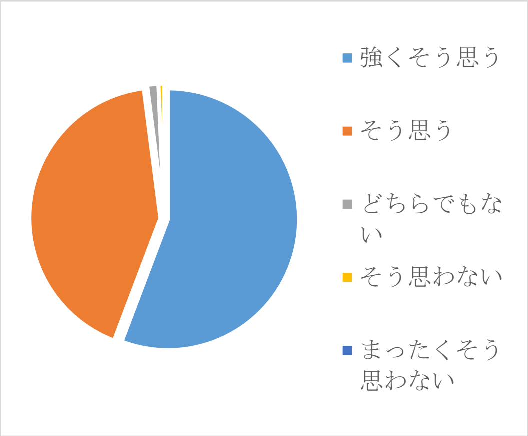
「コミュニケーションの訓練を受けるべき」



「カウンセリングの技術を学ぶべき」

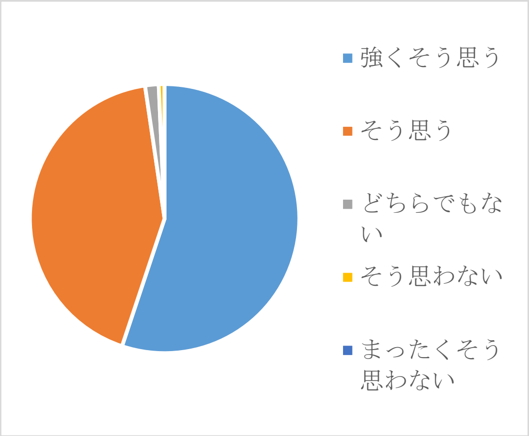


「一緒に目標設定する方法を学ぶべき」

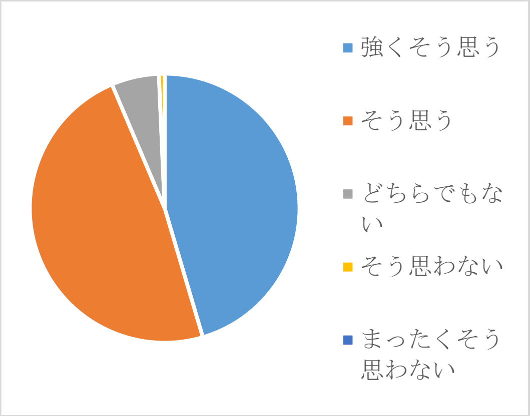


劇場の内容に関しては、「演劇というスタイルは面白かった」(4.6)、「今後の療養指導の参考になった」(4.4)、「満足した」(4.4)、「また参加したい」(4.4) という結果であった。

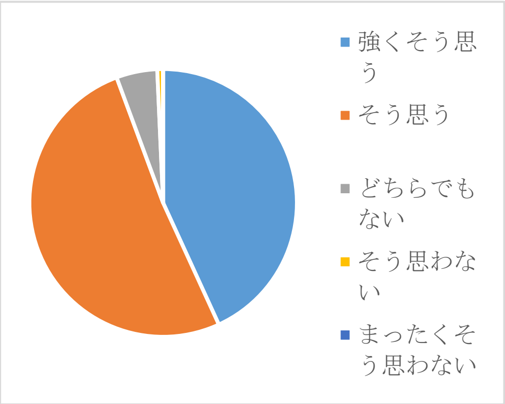
「演劇というスタイルは面白かった」



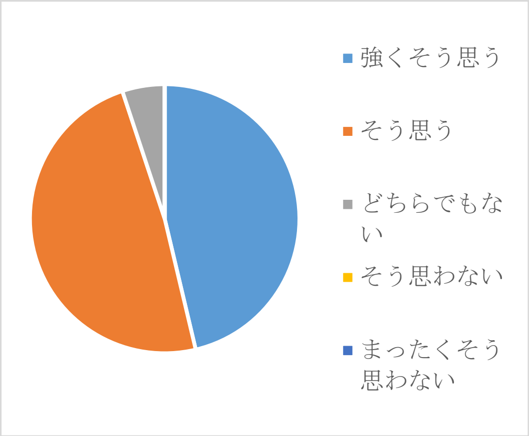
「今後の療養指導の参考になった」



「満足した」



「また参加したい」



（３）「糖尿病劇場」の評価：スタッフの視点から

糖尿病劇場にスタッフとして関わった医療者の気づきと態度の変化について、大阪と神戸での 2 回の糖尿病劇場を取り上げ、それぞれにスタッフとして参加した医療者に後日、フォーカスグループインタビューを実施した。その結果を質的に検討した結果を示す。
スタッフとしての学びは、①振り返り効果､②コミュニケーションスキル実感効果、③チームビルディング効果、としてまとめられた。
また、現在の診療・療養指導に役立っている点としては、①患者を人として見る視点の獲得、②役を演じて（観て）感じたことの診療・療養指導への反映、③やりがいの再認識、が挙げられた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 6 件）

① 岡田浩、【糖尿病治療のリスク管理と患者支援】エンパワーメント・アプローチに基づく面談技法、薬事、55 巻、2013、228-232
② 朝比奈崇介、森田巧、岡崎研太郎、大橋健、山本壽一　糖尿病劇場ワークショップにおける携帯電話利用型アンケート投票及びツイッター併用システム「ケータイ de アンサー」の利便性、日本糖尿病情報学会誌、査読有り、10 巻、2012、5-13
③ 岡田浩、大橋健、朝倉俊成、影山美穂、

朝比奈崇介、山本壽一、岡崎研太郎、「演劇」を取り入れた聴衆参加型研修「糖尿病劇場」による教育効果、Clinical Pharmacist、4巻、2012、504-508
④ 岡田浩、糖尿病劇場とは？「糖尿病劇場」の企画の仕方やチーム作りについて教えてください、肥満と糖尿病、10 巻、2011、733-734
⑤ 朝比奈崇介、岡崎研太郎、大橋健、山本壽一、糖尿病劇場とは、内分泌・糖尿病・代謝内科、31巻、2010、268-274
⑥ 岡崎研太郎、インスリン自己注射を知る！自己注射におけるコンプライアンスと指導、糖尿病ケア、7 巻、2010、970-974

〔学会発表〕（計9件）
① Kentaro Okazaki, Hiroshi Okada, Ken Ohashi, Toshikazu Yamamoto, Takayuki Asahina, Evaluation of a novel educational program for healthcare providers to learn about the empowerment: Diabetes Theater, a workshop including drama and discussion, American Diabetes Association's 73rd Scientific Sessions, 2013.6.24. Chicago, U.S.A.
② 岡崎研太郎、岡田浩、糖尿病劇場に関わったスタッフの学びを振り返る：フォーカスグループインタビューによる評価、第 56 回日本糖尿病学会年次学術集会、2013年5月17日、熊本市
③ 岡田浩、岡崎研太郎、参加型プログラム「糖尿病劇場」におけるシナリオ作りのコツ、第 49 回日本糖尿病学会近畿地方会、2012年11月17日、京都市
④ 馴松麻悠、横山有子、山下己紀子、田上展子、江後京子、永峰知子、佐藤直美、中川育美、田村美貴、岡田浩、岡崎研太郎、臨床検査技師による療養指導の劇を取り入れた参加型講演会「糖尿病劇場」の試み、第 49 回日本糖尿病学会近畿地方会、2012年11月17日、京都市
⑤ 岡崎研太郎、岡田浩、大橋健、山本壽一、朝比奈崇介、コミュニケーションに焦点を当てたプログラム「糖尿病劇場」の実践と評価、第4回日本ヘルスコミュニケーション学会学術集会、2012 年 9 月 7 日、神奈川県藤沢市
⑥ 岡崎研太郎、大橋健、山本壽一、朝比奈崇介、参加型プログラム「糖尿病劇場」の質問紙調査から見えてきた糖尿病診療の課題、第 55 回日本糖尿病学会年次学術集会、2012年5月18日、横浜市
⑦ 岡崎研太郎、糖尿病エンパワーメントの理念と実践～糖尿病劇場の経験から～、第21回日本医療薬学会年会、2011年10月1日、神戸市
⑧ 岡崎研太郎、大橋健、山本壽一、朝比奈崇介、大規模ワークショップにおける「ケータイ de アンサー」の可能性　糖尿病劇場の経験から、第 54 回日本糖尿病学会年次学術集会、2011年5月21日、札幌市
⑨ 岡崎研太郎、岡田浩、音喜多節子、久保田眞由美、田嶋佐和子、西雅美、西澤玲子、村内千代、大橋健、朝比奈崇介、山本壽一、医療スタッフの振り返りを目指した「糖尿病劇場」の実践と参加者の評価、第 53 回日本糖尿病学会年次学術集会、2010年5月29日、岡山市

〔図書〕（計1件）
① 石井均：監訳、訳者代表：大橋健、岡崎研太郎、糖尿病 1000 年の知恵～私たちが患者さんから学んだこと～、医歯薬出版、2011

６．研究組織
(1)研究代表者
岡崎　研太郎（OKAZAKI KENTARO）
独立行政法人国立病院機構（京都医療センター臨床研究センター）・臨床研究企画運営部・研究員
研究者番号：90450882

(2)研究分担者
岡田　浩（OKADA HIROSHI）
独立行政法人国立病院機構（京都医療センター臨床研究センター）・臨床研究企画運営部・研究員
研究者番号：10533838

坂根　直樹（SAKANE NAOKI）
独立行政法人国立病院機構（京都医療センター臨床研究センター）・臨床研究企画運営部・研究室長（予防医学）
研究者番号：40335443

(3)連携研究者
なし